

第104回 災害ゴミはゴミか？

IT生

災害廃棄物（災害ゴミ）の話は本欄で幾度か触れた。

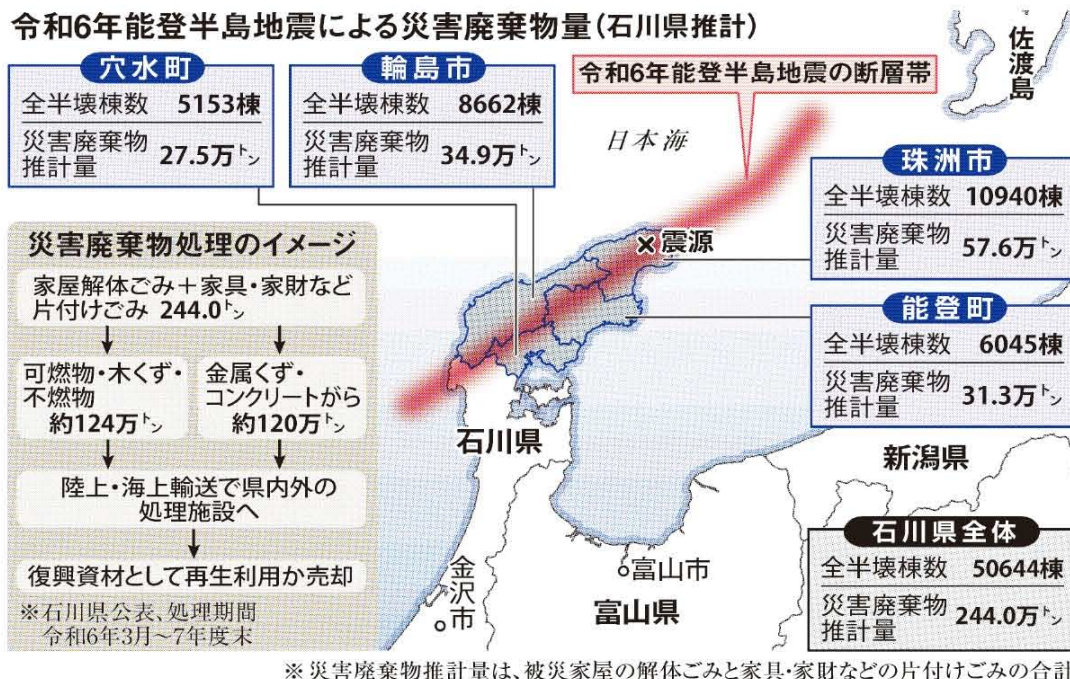
このたび、家屋倒壊が多かった能登半島地震でも災害ゴミが多く出た。

能登半島地震の特徴は、熊本地震や東日本大震災、阪神大震災と異なり災害ゴミの搬出経路がほぼ壊滅状態であることだ。

そのことは東日本大震災の10分の1のゴミの量でありながら、東日本は3年でほぼ処理が終わったのに対し能登は2年をかけるということを見ても分かる。そして搬出経路は陸上のみならず、海上ルートも積極的に活用されることとなっている。

ただ、被災地沿岸部の港の水深が浅いため、コンクリートがらなどの重いものは運べず、倒壊家屋の木くずに限られる。木くずをできるだけ一度に多く運び、処理日数を短縮するためには、木くずに付いた土や泥などをふるいにかけて落とすのだそうだ。

というような話を、災害ゴミの専門家、研究者と話した際、「そもそもゴミと呼ぶべきなのか？」という思いで一致した。



石川県が公表した災害廃棄物の処理計画。東日本大震災の10分の1だが、東日本が3年だったのに対し、2年かけて処理を行うのだという

地震が起こり、家屋が倒壊し、そこにあった「生活」そのものが灰燼に帰す。東日本大震災でも処理にあたった専門家いわく、倒壊した家の前に家人やボランティアが取り出した思い出の品や家財道具が整然と並んでいる状況を見るたびに、処分していいものかどうか悩み、しばし立ち尽くすという。そしてよほど注意深く作業を進めないと、倒壊した家の中に遺体があることもある。今回の地震の輪島のように火災が起きたら、遺体は人骨となるから、見つけるのは困難の極みだ。部分は見つかっても、一部はゴミとして処分されてしまうことは避けられない。

それもこれも、「災害廃棄物」と称され、政府の方針のもと処理計画は粛々と進んでいく。処理の専門家や研究者の間では、「迅速もしくは効率的な処理」という言い方はせず、「最適化」というそうだ。「最適化」なら、被災者個人や地域の人々の思いに沿い、時間をかけ、復興に向かうことも意味する。

こうして考えると、生活と災害がいかに隣り合わせであるのかよく分かる。

(令和6年3月)